研究紹介

アフリカの森で考えるこころ観

大石高典 Takanori Oishi
（こころの未来研究センター特定研究員）

言語で表わされる「こころ」と非言語的な「こころ」

日本語の「こころ」という言葉は、響きが美しい。そして単純に英語の heart や mind や spirit に置き換えることができない多義性と曖昧さをもっているところが魅力である。この一見とらえどころのないようにすら思える「こころ」という概念は、世界の人類文化の多様性の中に置いたとき、どんな位置づけになるだろうか。

あえて、私たちが「こころ」という日本語を使ってものごとを考え、世界に発信していくためには「こころ」が表わすものの普遍性と固有性を十分に踏まえ、地球上の様々な文化に属する人々にわかりやすく説明できなければならない。なぜ「こころ」なのか、「こころ」でしか表せないものはあるのか、あるとすればそれは何なのか?

これらの問いに答えられるだけの検討が必要になる。

この問題に対して、さしあたり、2つのアプローチが考えられる。1つは、地球上のさまざまな社会における「こころ」に類似した言葉や概念が表わす主観的な意味を文献資料やコーパス資料を用いて通文化的・通時代的に比較するという方法であり、2つめは、「こころ」がどのように行為者の間に立ち現れるのか、という現象としての「こころ」をなるべく客観的な方法で観察することにより、非言語的な、より生物学に近い次元から「こころ」の意味するところを解きほぐしてゆくという方法である。

こころ観を探る手がかりとしての動植物

ここでは、異文化におけるこころ観について、私の調査地である中央アフリカ・カメルーンの熱帯雨林の中の焼畑農耕民であるバクエレ社会での経験から考えてみたい。

まず、「あなたにとって、こころって何だと思いますか?」といきなり尋ねることはできない。このように問われれば、質問の意図が分からずたじろぐか警戒するのが普通である。しかし、こころ観を探るてがかりは、具体的な他者やものとの関わり合いの中から探ることができる。

例えば、動物や植物との関わりの中にこころ観の一端をかいまみることができる。熱帯林には、蜜を分泌したり、住み場所を提供して強い顎をもったアリを呼び寄せ、植物に襲いかかる動物から守ってもらうという防衛共生を行う植物が多く知られており、アリ植物などと呼ばれる。バクエレの人々は、この一種であるレゴックゴン（*Barteria nigritiana*, PASSIFLORACEAE）という植物に恋愛成就のまじないをかける。この兵隊アリがウジャウジャと這いまわる樹皮に小刀で引っ掻き傷をつけながら、意中の相手の名前を唱える。アリはナイフに噛み付き、手にまでよじ登ってきて食らいつく。木の幹に傷をつける回数は多い方がよく、目当ての女性が求愛を受け入れてくれるまで毎日繰り返す。唱える願い事は決して他人に聞かれてはならず、この祈願を行っている様子を他人に見られては効果は水の泡になる。これを行うことにより、この植物とアリのように男女がいつでも一緒にいられるようになるのだという。バクエレの人々は、アリと植物の共生関係を観察し、それを自分たちの身近な関係に読み換えているのだが、アリに手を刺されながらの文字通りの行は愛のなせるわざであろう。自らに苦痛を与えながら、願いをこめる仕方は日本の「お百度参り」や「丑三つ参り」にも通ずる。

バクエレ人に「願掛け」の対象とされるアリ植物 *Barteria nigritiana*

熱帯林に生息する多くの植物は、身体症状だけでなく、自分や他者のこころ、そして場合によっては狩猟や漁労の対象となる動物のこころに対して効く「薬」である。名前のつけられている植物の多くにそのような力があると信じられている。

森の民の「こころ」の行方

アフリカ各地の森とその住民は、熱帯林伐採などの開発と自然保護の間で揺れている。例えば、カメルーン東南部を例にとっても、1960年のフランスからの独立前後には強制的な移住や定住化が行われ、70年代からの伐採会社の進出、90年代からの自然保護政策の実施と国立公園の設定が行われた。こういった変化は、一方的に外部から押し付けられたものだったと言える。東南アジアや南米アマゾンの多くの地域と同様に、これら外部からの介入は森の景観を変え、人々の生活に貨幣経済を浸透させた。過去50年間に起こった変化は、物質的にも精神的にも大きく森に依存して生きてきた人びとの「こころ」やこころ観にどのような影響を与えつつあるのだろうか。

アフリカの森に棲む人びとが、これからどのような未来を選択してゆくことになるのか、多角的なアプローチから人びとの置かれている客観的な状況を明らかにしてゆくのと同時に、人びとのこころがどちらの方向に向かってゆくのかを理解するためには、食事や生業活動などの眼に見える生活の変化とともに、こころの動態を含めたホーリスティックな人びとの生態を探る学際的な研究が必要だろう。

ブランコ遊びをするバクエレ人のこどもたち

日本とアフリカをつなぐ

海外での調査から日本に戻ると、行き交う人びとの顔が暗く見える。私だけでなく、多くの人が同様のことを感じていると聞く。比較的小さい社会で、自然と深くかかわり合いながら、人間どうしが互いの存在を確かめ合いながら生きるようなあり方とは対極的な疎なコミュニケーションの取り方をしている私たちの日本の生活だが、意外に共通するこころ観を持っていたりする。こころ観研究を進める中で、差異を大事にしながらも日本とアフリカの同時代を生きるこころとこころの間に新たなつながりと相互作用を生むような仕組みを作っていけたらと願っている。日本の「こころ」は、決して孤立しているのではなく、世界のこころとつながっている。

カメルーン東部州の熱帯雨林をつらぬく伐採道路